近代国家の服制・華族制度・栄典制度を中心に

商・刑部 芳則准教授

新しくなった研究室で

明治維新を契機に、日本の政治・社会は大きく変化する。その明治期の風俗史が研究分野だが、中軸となるテーマは「近代国家の服制」「華族の制度と役割」「栄典制度と儀礼」の三つである。

「服制」とは、衣服の制度のことであり、服制によって定められた服を制服という。「近代国家の服制」では、日本人が和服から洋服へと変化・発展した要因を考察する。ここでのポイントは大礼服制。華族や文官には制服が定められた。「しかし、華美な大礼服は高額で、一見その特権は魅力的に思えるが、着ることに満足していたかは疑問である」と話す。ただし、和服から洋服へと推移する原点は大礼服制にあった。明治5年11月12日制定。この日は「洋服記念日」である。

昭和22年まで、わが国には華族制度という貴族階級が存在していた。公家に由来する公家華族、江戸時代の藩主に由来する武家華族、そして国家への勲功により華族に加えられた新華族（勲功華族）である。「華族の制度と役割」では、華族制度によって彼らがどのような役割を担い、いかなる活躍をしたのかを追究している。とりわけ注目しているのは公家華族。

「彼らは明治以前も、それ以降も決して裕福ではなかった。政治家や官僚の多くは新華族が起用された。だが、天皇にとって最も重要な存在は公家華族だった。こうした華族制度の矛盾点や本質的な問題に着目して研究を進めている」という。

栄典制度とは、天皇が授与する位階、勲章、爵位のこと。「栄典制度と儀礼」では、制度の歴史的意義やそれに伴う儀礼式について研究している。ここでのキーワードは「勲章の現存」である。

「古代の律令国家から続く位階は贈位を除いて現存しない。一方、爵位も戦後に消滅する。しかし、勲章だけは一時停止するものの現在も残っている。性格の違う栄誉の中で、なぜ勲章だけが残ってみる必要がある」と指摘する。

苦渋の末に採用

「士農工商」から「四民平等」への変化は、一見「実力が伴う社会」の到来と考えられがちだが、「従来の身分秩序を引きずっており、すぐに変わるものではなかった」と話す。実際、明治初期には洋服着用をめぐってさまざまな抵抗がおこっている。

制度の矛盾や疑問点に着目

風俗史は宝石になる前の原石

「和服から洋服」の原点は大礼服制

明治期の風俗史を描いた刑部准教授の自著。『京都に残った公家たち　華族の近代』（左）は8月に上梓したばかりの新刊

では、なぜ制服に洋服が採用されたのか。その理由を「当時の洋服は軍服に限定されていた。普段の服装は、従来の公家や武家が着用したものを組み合わせたものであった。だが、廃藩置県の後で洋服・散髪・脱刀が三点セットとなって、時代を席巻する。苦渋の末の選択であったが、ここで洋服が採用される。洋服だと外見から従来の身分が分からなくなる。四民平等に基づいた政策の表れであったと考えられる」と説明する。

素朴な疑問がきっかけ

風俗史を研究するきっかけは、子どもの頃の素朴の疑問にあった。時代劇や戦争映画を観ていると、現代の生活様式と異なる場面がでてくる。「なぜ、和服が洋服に変わったのか？」「そこには深い理由があるはずだ」。その疑問が現在の研究にも連綿とつながっている。

日本史の中心は政治・社会史に偏りがちだが、風俗史は未開拓の分野なので多くの魅力的な課題が残されていると語る。

「我々の身近にある事象や場面が意外に見落とされてきたように思う。学問の対象でなかったことに光をあてて分析することで、イメージが変わってくる。この研究は、いわば宝石になる前の原石である」と風俗史を重視する。

商学部で歴史を教える意義について問うと、「商（あきな）いには、生活様式や文化の変化が重要な要素。こうした変化に敏感になると同時に、歴史の先人から時代を先取りした成功例を学び、自分なりの独創的な発想を身につけていただきたい」と話す。

プロフィル

刑部　芳則（おさかべ・よしのり）平成22年中央大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（史学）。同年中央大学文学部兼任講師。23年日本大学商学部助教、26年准教授。所属学会は、明治維新史学会委員など。著書に『明治国家の服制と華族』（吉川弘文館）、『洋服・散髪・脱刀　服制の明治維新』（講談社選書メチエ）、『京都に残った公家たち　華族の近代』（吉川弘文館）。東京都出身。

実践教育に徹したテレビ番組制作

芸術・鈴木 康弘教授

テレビ番組制作の教育で最も教えられたのは、平成6年から1年間、サバティカル研修制度でニューヨーク大学へ留学した時だ。当時35歳。学ぶと共に、どんな教育をしているかを盗んでやろうと思っていたが、その徹底した現場主義に驚いた。

米国ではケーブルテレビが発達しており、大学にも4チャンネルあって、授業などを配信していた。その中で毎週1回30分のニュース番組があり、これを学生自身が手分けして取材・編集し、放送していく。米国では地方へ行くほど、大学の放送局が影響力を持って町の役に立っている。

もちろん全国ネットのプロデューサーが非常勤講師として指導にあたっていたが、出来上がった作品のレベルは正直言ってまだまだのレベル。しかし「いや、いいんだ。最初はトラブルがあっても、どんどん改善していくところに期待している」というのが教授の弁だった。

それでも放送後は毎回2時間位の反省会。そんな実践教育を日本でもやりたいと、取り組んだのが東京MXテレビでの「PMクラブ」など。バラエティ色の強い30分番組で、学生の作ったVTRを挿入しながら展開していく。これを隔週1回で半年間、2年にわたって放送した。

制作した数々のドキュメンタリー作品を前に

「考える」テレビ制作を重視

ドキュメンタリーの可能性を探る

学年の枠を取っ払った課外制作で、集まったのはテレビ制作に音響技術、映像技術、CMの各専攻から約70人。放送に穴を開けるわけにはいかない。学生の作業は連日のように続き、中には大学に泊り込む学生も。とくに放送局への納品間際の編集作業は深夜遅くまで続くのが常であった。皆が必死だったが、日頃の勉強の成果を試す良い機会にはなった。

私自身も卒業時には大手制作会社への就職が決まっていたが、指導教授の誘いで、まだ創作活動が続けたく大学に残ることを決めた経緯がある。当時はまだ大学院に映像芸術の専攻がない時代。一方で、大学3年生の時から教授の紹介で週に2回はNHKに出入りし、小学生低学年向け音楽番組のサブディレクターとして番組作りを手伝った。

秘境の村が出発点

その縁で人脈が広がり、平成元年にNHK教育テレビで放映されたのが「秘境の村のくらし～パキスタン・シムシャール村～」。もともとは学生の体験談にピンときて、パキスタンと中国、インドの国境山岳地帯に約15人の大所帯で遠征し、テレビが世界で初めて入ったドキュメンタリー番組に仕立てた作品である。

これが自分の出発点。その後もハンガリーの田舎ながら、国際的にも評価の高い少年少女合唱団の軌跡を追いかけて、DVDシリーズにまとめ続けている。実は今年3月も現地に出かけて撮影した。日々の授業や学生の相談に乗ったりと忙しいが、その合間に編集作業をこなしている。個人的にはテレビ・ドキュメンタリーの制作とその可能性を探るのが、私のライフワークでもある。

受け持つ授業はドキュメンタリーの演出に映像制作演習、そしてテレビ制作の実習。テレビ制作の現場では学ぶことが実に多いが、とりわけ指導で重視しているのは常に「考える」ということである。なぜ制作するのか、誰に向かって発信するのか、なぜそのように演出するのか、そのためには何をしなければならないか―？

制作の現場で学生たちにアドバイスする鈴木教授

学生の主体性を尊重

学生は撮影のことばかり気にするが、何のために撮影しているのかが見えてこないと、結局ぶれてしまう。そこを支えるのが、自分のものの見方、考え方で、これだけはしっかり掴み取らせたい。とはいえ、こちらから特別な指示はしないし、台本も提示しない。基本的には、実質的な部分は学生の主体性を尊重したい。

制作の現場では学生が企画を持ち寄ってプレゼンし、企画を選ばせる。我々から見て良い企画と思えなくても、学生に責任を持って形にさせる。そして、どこが悪いか、どこが上手くいっていないかを考えさせる。これが実践教育だ。

ゼミ生は3、4年の計49人で、その6割が女性で、元気があって、ガッツがあって放送現場でも評判がいい。それは嬉しいが、本音を言うと元気のいい男子も欲しい。

プロフィル

鈴木　康弘（すずき・やすひろ）昭和57年日本大学芸術学部放送学科卒。当時の日本大学芸術学部の副手となり、63年に助手、平成4年に専任講師。サバティカル研修制度で平成6年からニューヨーク大学へ1年間の留学を経て、8年に助教授、15年に教授。日本大学芸術研究所次長。専門は映像演出、映像作品の制作、テレビドラマ史など。日本映像学会に所属。京都府出身。56歳。